

LEARN WITH ソフトバンク ～魔法のプロジェクト 2024～ インクルーシブ教育 実践事例

事例の活用について

※本事例の知的財産は投稿者に留保されます、使用される際には出典として
「LEARN WITH ソフトバンク ～魔法のプロジェクト 2024 組織名」 を記載ください。

■基本情報

組織名： 香川県立高松支援学校

所在地： 香川県高松市田村町
※都道府県・市区町村

氏名： 実践者1 増田純礼 : 実践者2 佐野将大

■インクルーシブ対応を検討するきっかけとなった児童・生徒（※以下「対象の子ども」と略）について

対象の子どもの学齢 選択してください。

障害種別：

- 知的障がい、知的障がいを伴う ASD
 高機能自閉、アスペルガー症候群 読み書き障がい
 注意欠損多動性障がい (AD/HD) 肢体不自由
 聴覚障がい 構音障がい 視覚障がい 病弱
 重度重複障がい その他 ()

主訴 (主な困り)

- 読む 書く 聞く 見る 話す 記憶する 移動する
 その他 ()

その他補足

特定の飲み物を好んで飲む生活を送っている。

■対象の子どもが利用している ICT について

① 利用端末（ハード） タブレット PC その他（ iPhone ）

② OS Windows MacOS Chrome Android iOS その他

③使用した ICT の機能やアプリを教えてください。複数あれば、ボックスを追加して記載してください。ネイティブアプリ（最初から搭載されているアプリ）の URL は記載不要です。

名称： Google Forms

紹介 URL： <https://docs.google.com/forms/u/0/>

名称： ChatGPT

紹介 URL： <https://openai.com/ja-JP/chatgpt/overview/>

④上記の ICT を活用して、対象の子どもの困りをどのように軽減されたかを詳しく記載ください。

『魔法のプロジェクト in たかまつ』参加以前の様子 対象児は、幼少期から「特定の飲み物しか受け付けない」という生活を送ってきており、それが原因となっているかは不明だが少々健康状態が心配であるという状況が継続されていた。

『魔法のプロジェクト in たかまつ』での様子 実践者、母、対象児が参加し、構造化された飲み物を飲む活動に取り組んだ。見せてみる、匂わせてみる、飲ませてみる、というような手順を丁寧にすることで、これまで飲むことができなかった飲み物を対象児が飲む^{※1}姿が見られ、保護者は驚くとともに「案外他の飲み物も飲めるのかもかもしれない」という感想をもった。

『魔法のプロジェクト in たかまつ』参加後の家庭での様子 保護者が、家庭でも飲み物を対象児に提供する取り組みを継続した。すると、すべての飲み物を拒否するように^{※2}なり、学校へ相談があった。

学校と家庭の連携① 家庭では、水分を摂取できることを優先し特定の飲み物を飲む生活に一度戻した。学校では、すべての飲み物を拒否するようになった背景やうまく進むポイントを探るため、飲み物の取り組みを継続することにした。

学校での取り組みの様子 飲み物の形状（さらさら）であることの影響もあるのではないかと^{※3}と学校で感じるようになり、とろみを付けた状態で飲み物実践を継続。また、全ての飲み物を拒否しているというのは、飲み物が提供されること自体への拒否であり、提供される様子を見て味を想起することの困難さが背景にあるのではないかと^{※4}と捉え、飲み物の数や見せ方にさらに配慮しながら飲み物実践を継続した。

学校での変化 飲み物の提供の手順は「①はじめにとろみをつける②におわせる③注ぐところを見せる（透明な容器）④ペットボトルを目の前に置く⑤正面からスプーンを提示する」とした。その後は安心できるよう「特定の飲み物」も準備するようにした^{※5}。そのようにすることで、「Qoo 白ぶどう味」「GreenDakara（他のスポーツドリンクは拒否する）」を受け入れて飲むことができるようになってきた。

学校と家庭の連携② これまでの実践で得た発見や仮説^{※1※2※3※4※5}を盛り込み、飲み物実践を家庭と改めて共有することを狙って「対象児専用の飲み物の取り組みを記録するアプリ（図1）」を GoogleForms で作成した。2週間程度過程で実施してもらった。その後、学校での記録と合わせ、ChatGPT も使いながら分析した。

「対象児専用の飲み物の取り組みを記録するアプリ」 GoogleForms

日時は？ *

YYYY MM DD 時刻
2025 / / :

あなたの立場は？ *

母
 父
 担任

何の飲み物ですか？ *

豆乳紅茶味+牛乳
 アンパンマン プドウジュレ
 Qoo 白ぶどう
 グリーングカラ
 お茶
 その他: _____

(飲んだ場合)どの手順のときに子どもからの動きがありましたか？

容器を見せる
 匂いをかぐ
 そそぐところを見せる
 実際に飲む

どの手順の時に嫌がりましたか？

○○を飲もうねと声を掛ける
 容器を見せる
 匂いをかぐ
 そそぐところを見せる
 実際に飲む

気になったことはありますか？

回答を入力

図1 学校と家庭との連携②で活用した記録アプリの内容

アプリの構造について

日時は、自動で記録されるのだが、後で記載したいときのために項目を設けた。

飲み物の選択肢は、学校での実践をもとに、実践者Ⅰが提案をした。

手続きについては、直接保護者と共有しているため、自発的な動きが出たときの記載をしてもらう構造を試してみた。自発的な要求があった場合、それはどのタイミングだったか？自発的な拒否があった場合、それはどのタイミングだったか？という記載に留めることで、保護者の負担軽減を狙った。

自由記述の欄も設けることにした。

■インクルーシブ対応状況について

① インクルーシブ対応の検討の 児童生徒は、どの範囲まで利用が可能ですか？

教科	<input type="checkbox"/> 全ての教科で使用可能 <input type="checkbox"/> 特定の教科のみ使用可能
場所	<input type="checkbox"/> 通級等のみ <input type="checkbox"/> クラス限定 <input type="checkbox"/> 学年限定 <input type="checkbox"/> 学校全体
利用シーン	<input type="checkbox"/> 宿題 <input type="checkbox"/> 授業中 <input type="checkbox"/> 小テスト <input type="checkbox"/> 定期テスト <input checked="" type="checkbox"/> その他 ()

② 周囲の児童生徒が ICT を使用するにあたり、個別の許可が必要ですか？

はい いいえ

■インクルーシブ対応に向けての工夫について

①前問で、「いいえ」と回答された方にお伺いします。環境整備に向けた実施事項/工夫点について記載ください

実施事項/工夫点

■その他

参考になる写真があれば、こちらに添付してください。

※個人の写真が含まれる場合、事前に保護者の許可が得られているものに限りです。詳細は投稿要綱をご確認ください。

■変化や効果について

①対象の子どもにどのような変化がありましたか

【目的・方法】

子どもの変化について考察するために、12月までに実践者1がつけた21の記録と、2月から保護者と実践者1がつけた35の記録を分析した。分析はいずれもチャットGPTを用いた。

【結果】

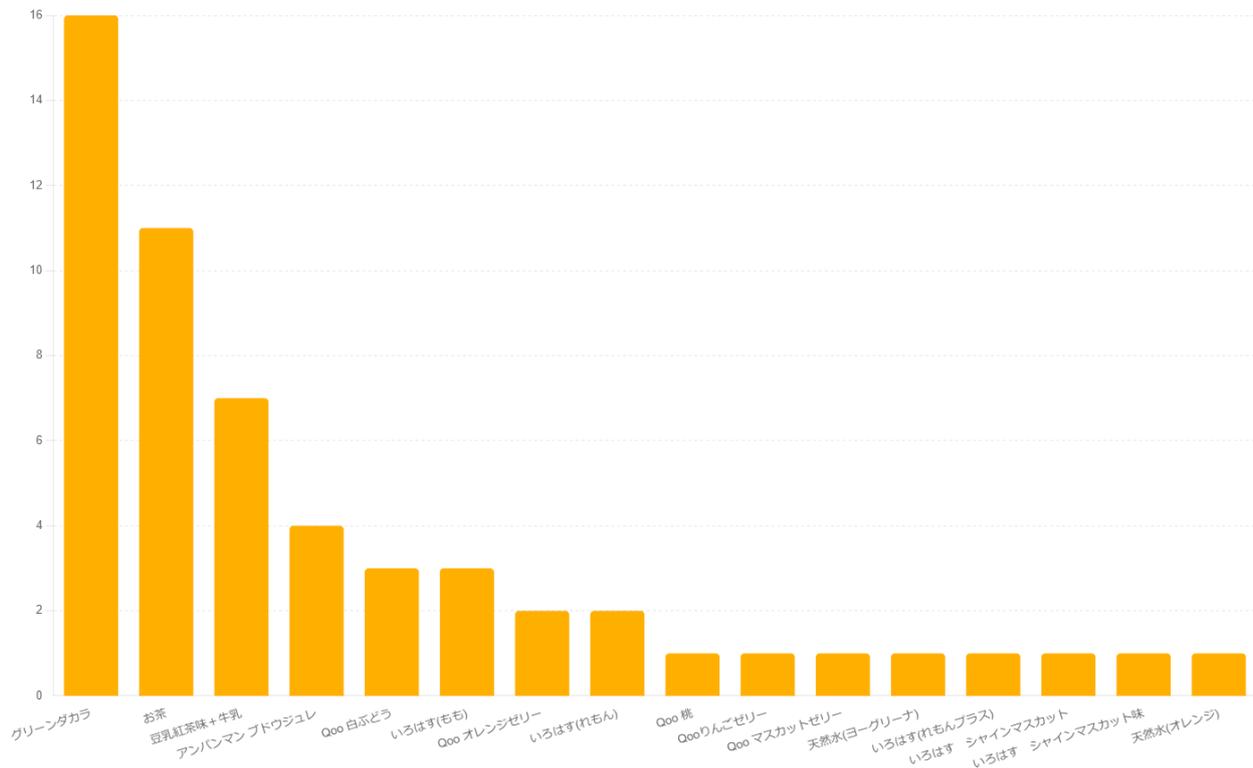


図1 「実践期間中に実際に飲んだ飲み物」

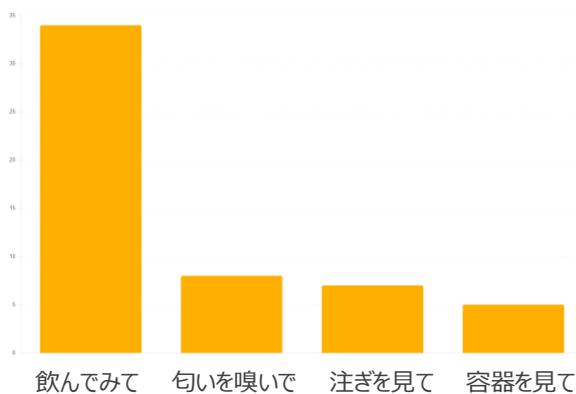


図2 飲み始めたタイミングの記録

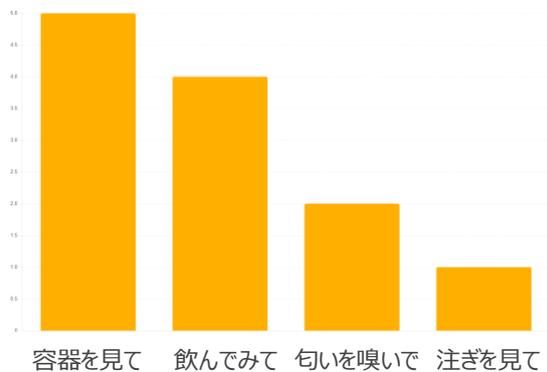


図3 飲み物を嫌がったタイミングの記録

プロンプト① 2024年の「気になったこと」に関する記載を要約して下さい。

AIの回答①

2024年6月

学校で初めてブドウジュレを安定して飲み干すことができた。自宅でも試し、一回量を調整。

2024年7月

初めて自宅で夕食時にお茶を飲ませる試み。とろみなし。喉が渴いた状況では40～50cc飲めた。

2024年9月

豆乳を飲むコップにジュレを入れると、準備の様子を注意深く見ていた。

飲み物の準備に対する興味や期待の兆候が見られた。

2024年10月

飲む相手が変わっても問題なく飲めた。

豆乳用のコップに白ブドウジュレを入れたところ、特に違和感なく飲めた。

2024年11月

とろみなしで、レンジで少し温めると70～80cc飲めるようになった。

初めてグリーンダカラを試し、飲めた。

変化のポイント

最初は特定の飲み物（ジュレやお茶）の摂取に挑戦し、安定した飲み方を模索。

飲み物の種類を増やし、温度や容器の影響を検証。

飲む環境や相手が変わっても問題なく飲めるようになり、適応力が向上。

新しい飲み物（グリーンダカラなど）の導入が進んでいる。

このように、時間とともに飲める量や種類、環境の変化に対する適応力が向上していることが分かります。

プロンプト② 2025年の飲んだ飲み物の種類と、その時の反応の記録と気になったことの記録から、それらの関係性を推察して下さい

AIの回答②

1. 飲み物の種類と子どもの反応

グリーндаカラ (2回)

「実際に飲む」段階で反応あり。容器を見せると嫌がる様子が見られる。

豆乳紅茶味+牛乳 (2回)

容器を見せる or 匂いをかぐ段階で反応あり。嫌がる反応の記録はなし。

お茶 (1回)

「実際に飲む」段階で反応あり。匂いをかぐと嫌がる様子が見られる。

2. 反応パターンの傾向

グリーндаカラは、容器を見せると嫌がるが、実際には飲める

→ 視覚的な要素が影響している可能性あり (容器の色や形に対する反応?)

豆乳紅茶味+牛乳は、比較的スムーズに受け入れられている

→ 他の飲み物より警戒が少なく、匂いや容器の影響もあまりない?

お茶は、匂いをかぐと嫌がるが、飲むこと自体はできる

→ 香りの強さが影響している可能性あり (温度やとろみの有無も要因?)

3. まとめ

「容器を見せる」段階で嫌がることがある → 見た目や経験との関連がありそう

「匂いをかぐ」段階で嫌がることがある → 飲み物の香りに敏感な可能性

実際に飲むと受け入れられるものが多い

→ 事前の印象と実際の飲み心地に差がある?

今後の検討

(1) 容器を変えてみる (グリーндаカラの警戒を和らげるため)

(2) お茶の香りの強さを調整 (温度や濃さを変える)

(3) 豆乳紅茶+牛乳の受け入れがスムーズな理由を探る (甘さや味のバランス?)

このような視点で、さらに観察や試行を続けると、飲み物の好みや苦手な要素がより明確になるかもしれません。

実践者2の考察

図1から、一年間を通してグリーンダカラの存在感が大きいことが分かる。対象児は特定の飲み物を飲んでいる生活を送っていたが、これだけ見ても大きな変化と言えるのではないだろうか。

図2から、飲んでみるまでは慎重になることが多い様子が想像できる。図3からは、容器を見て嫌がったり飲んでみて嫌がったりと、見てわかっているのか飲んでみてわかるのかが混在しているように感じる。この部分は丁寧に考察する必要がある。

プロンプト①では、前半の学校での取り組みを簡潔にまとめてくれたと感じる。ジュレ、と表記されているが、「とろみ」をつけ、飲み物の形状をさらっとしたものから、すこしとろっとしたものに変化させていることを示していると考えている。実践者の感覚からしても、とろみがつくことで、対象児童にとって飲み物との向き合い方が良い方向に変わってきているように感じている。とろみなしで～というような要約の記載もあるが、とろみは対象児童の安心感を提供する物なのではないかと考えている。

プロンプト②で代表的な飲み物への反応が整理され、とても考えやすくなった。

グリーンダカラは容器を見ると嫌がるが、実際には飲める、ということは、これからの学習経験が大きく影響する部分であるということだろう。お茶についても匂いで嫌がるが飲むことができる、というのも、同様だと考える。AIがまとめている『事前の印象と実際の飲み心地に差がある』というのはその通りだと思う。とろみの導入により飲み心地に安心感が加わっているのであれば、今後、『容器を見せ、とろみをつけるところを見せ、飲み物を見せ、匂いを嗅いでもらって、飲む』という手続きがさらに重要になるのではないだろうか。

今後の検討(1)(2)(3)のうち、(1)の提案には反対である。容器を変えても対象児にとっては根本の解決にはなっていないのではないだろうか。『ペットボトルやその匂いから従来の“とろみなし”の飲み物がやってくる』のではなく、『とろみつきの飲み物がやってくる』、ということを繰り返し伝え安心してもらう必要があるのと考える。(2)については、選択肢を増やすという意味で賛成である。(3)は、これまで安心して飲めているものが来ることを、見て分かっている、と解釈できるのではないかと考えている。

飲み物の提供をどのようにするか、ということを考える実践を通して、対象児の飲み物の理解の仕方がどのようなものなのだろうか、そしてどのように経験を提供すればよいのだろうか、と考えを深める機会になった。グーグルフォームズを使った記録は、複数の実践者と保護者間で情報を共有するのに便利であった。また、AIを使った分析は、時間が短縮され、便利さを充分に感じた。ただ、細かな分析については疑問があり、それについてAIの答えをうのみならず、疑問をもってやりとりしていくことが今後も重要ではないかと考える。

このような実践を通して、対象児にとって分かりやすい選択肢や経験が提供され、生活が豊かになっていくことを願っている。

実践者Ⅰの考察

これまで特定の飲み物しか飲めないという状況でしたが、それ程困ってはいないのではないかと感じていました。特定の飲み物が常温で保てない飲み物であることから校外での摂取の仕方に困ること、高学年になって健康上の変化が現れ始めたこと、などの理由から、飲み物の幅を広げてもらうことをねらった実践を始めました。

実践を始めたころは、味を知って欲しい思いが強かったので、いつも使っているコップに飲み物を入れて、とにかく一口は口に含ますことをしてみました。でも、全く変化は見られず、途中心が折れそうになっていました。変化が感じられたのは、「とろみ」をつけた時期からだと思います。飲むというより、ゼリーを食べるような感覚で摂取できるようになったのではないかと感じています。いろいろな飲み物を試すことができるようになってきました。フルーツ飲料水を試したとき、ブドウ味への反応が良かったと感じたので、それをヒントに、白ブドウ、グリーンダカラ、と徐々に経験できる飲み物の種類が増えていきました。

対象児童とは4年の付き合いですが、今考えると、対象児童が周りの様子を見ている様子をあまり感じとれていませんでした。また、私の本人の意思を聞く方法や聞き方も定まっていなかった状況でした。自分で選ぶ経験を提供する機会が少なかったように思います。この実践を通して、飲み物を提供するまでに飲み物を準備している様子をじっと見つめていたり、飲み物の容器が移動する様子を目で追うようになってきたと感じます。対象児童にとって、毎日決められたものを飲む生活から、目で見て味のイメージがもしかしたら不十分な飲み物を飲む生活に変わったことで不安が高まった時期があったかもしれませんが、その分目の前で行われている様子をよく見るようになったと思います。不安は大きくなって欲しくありませんが、目の前の様子をよく見ることは、自分の意思を相手に伝えられる積極的な姿勢に繋がっていくと思います。

現在は、味で選ぶというより、いつも飲んでるとろみ具合かどうかを確認しているように感じています。月曜日は特に、一度目をぎゅっと閉じながら一口目を飲む時があります。まずは、安心して飲める状態にする。今後の課題としては、飲み物のボトルが他の入れ物に入れられても同じように安心して飲めるものだと分かってもらえるような工夫ができれば良いと思っています。

飲み物以外の場面でも、提示の仕方や感触、味覚、嗅覚などを組み合わせた「物や選択肢との出会わせ方」が、本人のより安心した生活や学習に繋がるのではないかと考えています。